

夢を追う卒業生 その26 平成31年2月21日

大学で日本史を研究するとはどういうことか

◇今回は、渡辺知行さん（立命館大学文学部日本史学専攻3回生）のレポートです！

プロフィール

渡辺 知行（わたなべ ともゆき）

2016年3月関高を卒業し、現在立命館大学文学部日本史学専攻3回生（日本中世史）。
今年（2019）6月：教育実習（地歴公民）で再びお世話になります。よろしくお願いします！

目次

- I 大学で日本史を学ぶとはどういうことか
- II では、いかにして日本史を「研究」するのか
- III 他人が書いた論文や著書は読むべきか
- IV 大学での日本史の研究はどこが楽しいか

I 大学で日本史を学ぶとはどういうことか

（1）大学日本史に対するイメージ

「高校の日本史っておもしろいな、大学でも日本史やりたいわ」と思っているそこのあなた！
大学で学ぶ日本史の授業や研究について、どんなイメージを持っていますか。僕も大学に入学した当初は、「歴代天皇の名前を全員覚えさせられるのかな」とか「源義経は本当にチンギス＝ハンだったのか？みたいなことを考えるのかな」といったように、高校で学んだ知識を更に深く掘り下げたり、「へーそーだったんだ」的な知識を学んだりする所なのだろうと思っていました。

（2）大学は「研究」するところ

僕は現在中世前期の「摂関政治」や「院政」を専門に研究していますが、たしかに学び始めた当初は、そうした「へーそーだったんだ」的知識、所謂歴史認識はとりあえず吸収しておきましたし、ある程度は必要だと思います。

例えば、小学生でも知っている藤原道長は、摂関政治の最盛期の1人であるにもかかわらず関白すら経験したことがなく、摂政だった期間も僅か1年、太政大臣に至っては3カ月しか歴任していません。では、彼はなぜ小学校の教科書にも出てくるほど有名なのでしょう。実は彼が自らの政治的手腕を発揮したのは、摂政や太政大臣を辞して国政から身を引いた後だったのです。天皇や周りの公卿からの目を気にすることなく、藤原氏一門を繁栄させるた

めに独自に家政機関を運営し、特に興福寺や法成寺といった藤原氏の氏寺に対する意識は非常に高かったといえます。そうして、藤原良房から続くそれまでの摂関政治のあり方を大きく覆した人物として評価されます。

「へーそーだったんだ」と思いますよね？ でも、こういったことはあくまで「勉強」であり、高校生の延長でしかありません。もちろん先述したように、ある程度は必要でしょう。ただ、大学生が主とするのは勉強ではなく「研究」です。新しいものを創り出していくことです。自分なりの斬新な歴史解釈を、根拠をもって展開していくための過程が、大学で行う歴史学の研究です。



高校生の時に使用していた日本史の教科書



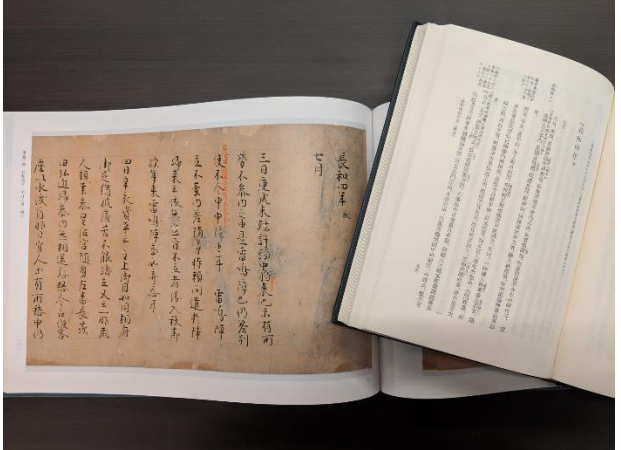
大学の図書館の歴史コーナー

II では、いかにして日本史を「研究」するのか

(1) 大学日本史の研究手法

では、独自の解釈を展開するための根拠は、どこに求めればよいと思いますか。理系分野であれば様々な実験やデータでしょうし、法学であれば六法でしょう。ずばり、日本史学は「古文書・文献史料」と言えます。博物館やテレビなどで、ぐちゃぐちゃな文字で何と書かれているのかさっぱり分からないボロボロに剥げた手紙や、漢字の羅列で「〇〇候。」のような堅苦しい表現の史料を一度は見たことがないでしょうか。そうした1次資料となる、当

時の人々が記録した文書を一字ずつ丁寧に読み進めることで、何かしらの疑問点や新たな視点が浮かび上がると思います（大学の授業を通して、解読するための一定の技能は習得できるので安心してください）。そこから「もしかしたらこうじゃないか」というある程度の予測を立て、その根拠となる史料を宝探しのように隅から隅まで探し出します。この過程に根気よく取り組むことで、今まで言われたことのない、新たな切り口で歴史解釈を構築することができるのです。

	
研究で使用している史料	『小右記』長和4（1015）年7月3日条

（２）日本史研究の難しさ

ところが、「だいたい100回予測を立てて本当にうまくいくのは5回程度だ」とある教授が仰っているように、なかなかうまく論理的に解釈を述べることは難しいです。藤原道長の孫で、藤原頼通の息子にあたる藤原師実（もろざね）と氏寺のかかわりを研究していた時のことです。彼は摂関・氏長者を引退した後、氏寺の中でも特に法成寺と宇治平等院（鳳凰堂）へは、頻繁に下向していたことがいくつかの史料から読み取れます。それだけでなく、別当補任権をも掌握しており、両寺に対する特別な意識があったことは確実といえます。ただ僕はそれを、両寺の創建者である道長や頼通に対する「憧れ」と表現してしまいました。これにはさすがに先生や学生から忌憚のないご意見を賜りました。師実が道長や頼通に対して憧憬の念を抱いていたか否かは、史料からは読み取れないからです。他の学生も人物像などを扱っていてよくやっていますが、一步間違えれば日本史学ではなく日本文学の研究になってしまう点に注意しなければなりません。

Ⅲ 他人が書いた論文や著書は読むべきか

（１）他人の論文や著書は、読まないほうがいい？

以上に申し上げたように、日本史を研究する上では、古文書や文献史料といった1次資料が備わっていれば、他人が執筆した論文や様々な専門書を読まなくても大袈裟に言えば事足ります。むしろ、そうした先行研究をあまりにも読みあさり過ぎると、他人が考えた意見や

解釈の中でしか歴史を考えることができなくなり、オリジナルな、誰も考えたことのない斬新な歴史解釈は生まれにくいと思いませんか？従って、**先行研究があまりなされていないテーマを扱って研究を進めるほうが、大きな成果をあげ易い**といえます。更に付け加えるならば、先行研究があまりされておらず、史料や古文書が山ほどあるテーマを見つければ、研究の半分は終わったといっても過言ではありません。

（２）他人の論文や著書は、いつ読むべきか

では、どのような場面で他人の論文や文献に目を通す必要があると思いますか。それは、**自分が考えた意見や解釈が、これまでの研究史の中で同じように言われたことがないか**を確かめる時です。過去に言われたことと同じ意見を述べても、研究成果としては全く評価されません。

僕自身も、最初の研究でその経験をしました。当時は、かの保元の乱で対立した藤原忠通と頼長兄弟の父親であり、師実の孫にあたる藤原忠実（ただざね）を扱っていました。一般的には家政機関に対する権限が停止される出家をした後に、彼はむしろその権限を強化したのではないかという意見を、史料的根拠をもとに展開しましたが、悲しいかな、全く同じことを京都大学の教授が執筆した著書に記述されていました（ただ、その著書には史料的根拠があげられていませんでしたが…）。

このように研究を進める上では、適宜関連する先行研究に目を通しておかないと、既に論じられてきたことと類似していた場合、所謂コピペをしたと判断されてしまいかねません。研究をし始める段階で、一通り研究史を整理するのがメジャーであり、確実だと思いますが、その際先ほども述べたように、先行研究であげられている見方や考え方にとらわれ過ぎないように注意しなければなりません（このような時こそ、知識が豊富な大学教授に直接伺ったほうがむしろ早く正確でしょう）。

IV 大学での日本史の研究はどこが楽しいか

（１）歴史研究の手応え

ここまでの話を聞いて、「大学でやる日本史って、どこが楽しいの？」と思われた方もいらっしゃるかもしれません。正直なところ、しんどい時の方が多いですし、何より孤独です。図書館でひらすら文献や古文書と対話する日々ですからね（笑）。また僕自身、文献史料や古文書を解読することにはそれほど苦ではありませんが、実は中高生の時から現代文が苦手なこともあり（センター試験 39/100 点でした（笑））、他人が書いた文章を読むのが苦痛で仕方ありません（現代の活字離れの一人です（笑））。それでも、やはり勝負所は「**発想力**」です。いかに面白いものを生み出そうとするかという力とエネルギーさえあれば、そして「**歴史が好きだあ！**」という気持ちさえあれば、必ず手応えをつかむことができる研究ができると思います。

僕自身も、最近ようやく手応えを感じるようになったような気がしています（この油断が怖い）。直近の研究では、藤原氏の氏寺が天皇に対する建前として機能し、個人や藤原氏一

門の救済は目的としていなかったことを明らかにしました。もしこの論がうまくいけば、京都大学教授の論を覆せるかもしれないと密かに興奮しているのですが、それよりもようやく論理的に欠けることのない研究成果を生み出せたかもしれない、という手応えをつかむことができました。

（２）貴重な経験



2018年10月28日（日） 於．第70回立命館史学会例会

普段の研究において何よりの活力となるのは、研究したことをまとめて発表をする時です。昨年（2018）10月28日（日）に、立命館大学史学会が主催する70回目の例会で、大勢の研究員や大学院生の前で発表する機会がありました。最後の質疑応答では、いい意味でも悪い意味でも予想以上の意見や質問が飛び交いました。さすがに大学院生がする質問のレベルは高すぎて、その内容を理解できず後で個人的に聞きに行ったりもしました。それほど、彼らは僕にはない様々な視点を持っており、「ここは特に良かった」「こうゆう観点でみたらもっとよくなる」といったご指摘が、今後の研究の活力になっています。全学生が所属するゼミでの発表も、自分が気づかなかった点が浮かび上がり、今後の道筋を示してくれる貴重な機会です。

(3) 大学日本史の面白さを伝える



2018年11月29日(木) 於: 岐阜県立関高等学校

そしてこの史学会での発表を、翌11月末に関高校で報告する機会がありました。少しでも大学の日本史の面白さが伝わればと思い、関高生向けに噛み砕いてお話ししましたが、こちらも想像以上に沢山質問をして下さり、改めて関高生は賢いなあと目を丸くしました。ほんわかした雰囲気楽しくやりとりすることができたので、歴史に対する興味が高くなっていて幸いです。今年(2019)6月には、教育実習で関高に行かせて戴けるので、そこでまた沢山の生徒たちに日本史の楽しさ・面白さを伝えればと今からとてもワクワクしています。